

2026 連合平和行動 in 沖縄

参加報告

～語り継ぐ戦争の実相と運動の継続で恒久平和を実現しよう～

2026年6月23日（火）～24日（水）の2日間にわたり、沖縄県において「2026 平和行動 in 沖縄」が展開されました。全国から約850名を超える仲間が集結し、東海3県からは23名、そのうち連合岐阜からは5名の代表団が参加しました。凄惨な地上戦の歴史を現地で深く学ぶとともに、今なお残る基地問題の現状に向き合い、恒久平和の実現に向け一丸となって連帯の声を上げました。

1.【初日】平和オキナワ集会・平和式典の開催

行動初日となる23日の午後、那覇文化芸術劇場なはーと（大劇場）にて「平和オキナワ集会」が開催されました。会場は満席となり、熱気に包まれるなかプログラムが進行しました。

- **第1部：基調講演「報道から平和を問う」** 講師には沖縄タイムス編集局長の赤嶺由紀子氏が登壇。「報道から平和を問う」と題し、メディアが戦争の実相をどう記録し次世代へどう語り継ぐべきか、また現代の緊張感高まる情勢における平和報道の本質について提起がなされ、参加者は熱心に耳を傾けました。
- **第2部：平和式典** 主催者を代表して連合・芳野友子会長が力強く挨拶し、労働運動が果たすべき平和への社会的役割を強調。続いて、地元歓迎挨拶として連合沖縄・仲宗根哲会長から、沖縄が置かれている現状と過重な基地負担について切実な訴えがありました。その後、次なる平和行動の地である広島へ想いを繋ぐ「ピースリレー」や「平和アピール」の採択が行われ、全員で恒久平和への誓いを共にしました。



主催者として、平和の重要性を強く訴える連合本部の芳野会長



2026 連合平和オキナワ集会に参加する連合岐阜からの参加者

2. 【2日目】戦跡を巡るピースフィールドワーク（Cコース）

2日目の24日は、朝方より「ピースフィールドワーク」が実施され、連合岐阜のメンバーは戦跡を中心に巡る「Cコース」に参加しました。

自然壕「糸数アブチラガマ」の体験

最初に訪れた「糸数アブチラガマ（自然洞窟）」では、激しい地上戦のなかで住民や負傷兵が避難し、過酷な状況を強いられた暗闇のガマの内部に入りました。電気もない暗闇の中で当時の人々が直面した恐怖を肌で感じ、戦争の凄惨さを強く突きつけられました。

ひめゆりの塔・魂魄の塔への参拝

続いて「ひめゆりの塔・ひめゆり平和祈念資料館」および「魂魄（こんぱく）の塔」を参拝。同世代の学生たちが巻き込まれた悲劇の歴史を深く学び、若くして犠牲になった多くの命へ静かに祈りを捧げました。

平和祈念公園と「平和の礎」

最後に訪れた「平和祈念公園・沖縄県平和祈念資料館」では、国籍や軍人・民間人を問わず、すべての犠牲者の名前が刻まれた「平和の礎（いしじ）」を前にし、戦争の惨禍を二度と繰り返してはならないという決意を新たにしました。



ガマの説明を聞く参加者



平和記念公園にて

3. 国際通りをデモ行進：基地縮小と地位協定見直しを訴える

フィールドワーク終了後の夕刻からは、県民広場にて『米軍基地の整理・縮小』と『日米地位協定の抜本的見直し』を求める集会・デモ」に合流しました。

集会の後、参加者一同は県民広場から牧志公園までの道のり（国際通り）をデモ行進しました。連合に集う仲間とともに、沖縄が今なお抱え続けている過重な基地負担の現状を広く市民や観光客にアピールし、地位協定の抜本的な見直しを強く訴えかけ、連帯の活動を行いました。



4. 連合岐阜 参加メンバーの感想・まとめ

- 「沖縄方々の戦争はまだ終わっていないと感じた」 凄惨な過去の歴史だけでなく、今なお広大な米軍基地が存在し、様々な問題を抱えている沖縄の現状を目の当たりにしました。戦争の影響や負担が過去のものではなく、現在進行形で続いていることを痛感させられました。
- 「『平和なくして労働なし』との言葉を大切な言葉だと感じた」 私たちが日々安心して働き、生活を送ることができるのは、大前提として「平和」があるからこそです。現地に足を運んだからこそ、労働組合が平和運動に取り組む原点であるこの言葉の重みを、改めて心に深く刻むことができました。
- 「普段の生活から真の平和のあり方を改めて考える機会になった」 沖縄での体験をその場限りのものにせず、岐阜に戻ってからの日常生活や労働運動のなかで、自分自身がどう平和に関わっていけるか、真の平和とは何かを問い直し、周囲へ伝えていく活動に繋げていきます。